

The logo for WE LEAGUE is displayed in a white rectangular box. It features a solid black circle to the left of the letters 'WE' in a large, bold, sans-serif font. To the right of 'WE', the word 'LEAGUE' is written in a smaller, all-caps, sans-serif font.

日本初の女子プロサッカーリーグ 「WEリーグ」

東京オリンピック・パラリンピックが終わった直後の9月12日(土)、日本初の女子プロサッカーリーグ「WEリーグ」が開幕した。正式名称は2021-22 Yogyibo WEリーグ（ニセンニジュウイチ ニジュウニ ヨギボー ウィーリーグ）である。

周知のとおり、「なでしこジャパン」は2011年のFIFA女子ワールドカップでアメリカにPK戦の末勝利し、世界チャンピオンとなった。東日本大震災で日本中が沈んでいたときに届いた快挙の知らせは、国民栄誉賞につながるほど日本中を湧き立たせた。

しかし女子サッカーをとりまく環境は、残念ながらほとんど変わらなかった。日本におけるスポーツの社会的地位の低さとともに、女性が社会で活躍するうえでの諸課題が“壁”となって立ちふさがっていたことも影響するのだろう。

WEリーグチェア人の岡島喜久子氏から直接話をお聞きする機会を得た。どのような背景からこのリーグが誕生し、どこへ向かおうとしているのか。「プロスポーツが新たに誕生した」というだけでなく、高い“志”を持って始まったWEリーグに注目したい。

日本初の女子プロサッカーリーグ 「WE リーグ」を語ろう！

岡島喜久子（公益社団法人日本女子プロサッカーリーグ 初代チェア）

※公開サロン（通算 298 回）として開催（p.108 参照）



【日 時】 2021 年 8 月 23 日 (月) 19:30 ~ 21:30 (終了後はオンライン懇親会 ~ 23:30 すぎ)

【会 場】 オンライン (Zoom)

【テーマ】 日本初の女子プロサッカーリーグ「WE リーグ」を語ろう！

【演 者】 岡島喜久子（公益社団法人日本女子プロサッカーリーグ 初代チェア）ほか

【コーディネーター】 中塚義実（NPO サロン理事長／筑波大学附属高校）

【参加者（サロンファミリー）23 名】 ★は NPO サロン会員

★安藤裕一（GMSS ヒューマンラボ）、江川純子（WE リーグ事務局長）、小幡真一郎、笠野英弘（山梨学院大学）、加納樹里、熊谷建志（FC 城東）、★小池靖（在さいたま市サッカースポーツ少年団指導者）、小松章一、★嶋崎雅規（NPO サロン理事／国際武道大学）、清水諭（筑波大学体育系）、★関秀忠（NPO サロン理事／弁護士）、高平豊明（サッカー文化フォーラム）、田島璃子（NPO サロン事務局／早稲田大学 2 年）、★田中俊也（三田市整形外科）、★茅野英一（NPO サロン監事／元大学教員）、張寿山（スフィード世田谷／明治大学）、★中塚義実（NPO サロン理事長／筑波大学附属高校）、野村忠明（埼玉ソーシャルフットボール協会運営委員／会社員）、本郷由希（会社員）、★本多克己（NPO サロン理事／阪神ユナイテッド）、守屋佐栄（スフィード世田谷サポーター／歩くサッカーのプレイヤー）、★守屋俊秀（東京都 2 級審判）、吉原尊男

【参加者（サロンファミリー以外）21 名+ 20 名】

稲嶺碧（筑波大学附属坂戸高校生）、井上秋香（早稲田大学 4 年／大学スポーツチャンネル /Sports forsocial）、宇留間範昭（東急）、岡島喜久子（WE リーグチェア）、川崎修（筑波大学附属中学校）、菊地美里（ヨガインストラクター）、久保田淳（FC 東京）、小寺昇二（横河武蔵野スポーツクラブ／元千葉ロッテ）、小林美由紀（WE リーグ理事）、正松本文幸、杉山さやか（バレンシア CF オフィシャルアカデミージャパン）、鈴木崇正、関佳史（神奈川県サッカー協会副会長）、田中章（元（株）ジャパンスポーツプロモーション役員）、中村年秀（一般会社員／ベレーザ応援）、平田礼次（フィリピンフットボール連盟ユースダイレクター／JFA 派遣事業派遣指導者）、村松邦子（WE リーグ理事）、山内直（浦和レッドダイヤモンズ）、吉田匡廣（株式会社ダイシンコラボレーション代表取締役）、來田享子（中京大学）、渡邊秀幹（プロバドミントンコーチ／BADMINTONFaun 代表）ほか 20 名

【報告書作成者】 守屋俊秀 ほか

【目次】 はじめに（中塚義実）

- I. WE LEAGUE for サロン 2002 前半（岡島喜久子）
- II. ハーフタイム－質疑応答
- III. WE LEAGUE for サロン 2002 後半（岡島喜久子）
- IV. アディショナルタイム－質疑応答

はじめに (中塚義実)

定刻の7時半になりました。皆さんこんばんは。NPO 法人サロン 2002 が主催する「公開サロン」は通算 298 回目です。今回は、ご案内のとおり、9月から始まる「WEリーグ」を取り上げ、そしてなんとリーグ初代チェアの岡野喜久子さんにお越しいただくことができました。

本当にお忙しい中、パラリンピック開幕の前日に、神戸からご参加してくださいませ。

そして今回の「公開サロン」には、事前に 60 人以上の方から参加の申し込みがありました。

我々のこの会は、サロンファミリーという、あらかじめ登録された方に毎月の案内をさせていただいていますが、それ以外の方でも、テーマに興味もってくればウェルカムです。今回は、おそらく最も多くの参加者にきていただきました！

◆ JFA100 周年記念事業

今回の案内スライドです。テーマは「日本初の女子プロサッカーリーグ「WEリーグ」を語ろう」です。

今年が JFA100 周年ということで、JFA100 周年記念事業の申請をしました。ロゴを使わせてもらっています。

記念行事として認知されたことも、多くの方の目に触れることに繋がったのかもしれませんが。

無料・オンライン
8月23日(月)19:30~21:30

日本初の女子プロサッカーリーグ「WEリーグ」を語ろう！
第298回公開サロン

演者：岡野喜久子 ほか
(公益社団法人日本女子プロサッカーリーグ 初代チェア)
※演者は変更の可能性があります

【無料/オンライン】〈JFA100周年記念事業〉日本初の女子プロサッカーリーグ「WEリーグ」を語ろう！

JFA 1921-2021

◆ 注意事項

はじめに諸注意をいたします。記録用に録画をさせていただいております。映像を公開することはありませんのでご安心ください。著作権法および他の参加者の情報保護のため、記録行為をそれぞれが勝手にすることは固くお断りします。NPO サロンが責任をもって報告書にまとめ、ホームページで公開いたします。

報告書には、どのような方が参加されたのかという情報も掲載します。匿名の誰かがこっそり集まってやっているのではなく、氏素性を明らかにして報告書にまとめることをずっとやってきました。ホームページ上に名前が出ますので、公開できる方は氏名と属性(所属など)をチャットの方にご記入ください。趣旨はわかるけどホームページに名前や立場を出したくない方もいらっしゃると思います。その場合はその旨、チャットにご記入ください。

プレゼンの間、音声はミュートにしてください。動画がないので皆さん顔出してもらって大丈夫です。大きな反応をしてもらえると、話す側もやりやすいですよ。

質疑応答の時間は設けますが、気付いたことがあればその都度チャットにご記入下さい。

◆ サロン 2002 とは

公開サロンが初めての方もいらっしゃると思いますので、はじめに簡単に、私の方からご説明いたします。

写真は、主催者である NPO 法人サロン 2002 のホームページから持ってきました。「スポーツを通しての“ゆたかなくらしづくり”」が私たちの“志”です。何をしているかということ、毎月「月例サロン」をやっています。公開するときとファミリー限定のときがあります。今日は公開型ですね。また、年 1~2 回「公開シンポジウム」を行います。公開サロンの大規模版です。

SALON2002 特定非営利活動法人サロン2002

「スポーツを通してのゆたかなくらしづくり」が私たちの「志」です。
文化としてのスポーツを日本に根付かせるとともに、さまざまな社会問題をスポーツのチカラで解決すべく、仲間とともに考え、行動していきます。

◆ NPO サロンの主な事業

- 1) 月例サロン(今回が通算298回)
- 2) 公開シンポジウム
・10月と12月に予定
- 3) U-18フットサルリーグチャンピオンズカップ
・1月に千曲市で全国大会を主催
- 4) 広報誌「遊ASOBI」
・3月末に発行
- 5) その他: オリンピック教育など

◆ サロンファミリー(全国に約100名)
“志”に賛同すれば「ファミリー」の一員に！

- 1) “同志”との交流
- 2) “情報”が得られる
- 3) サロン事業への“優遇”
- 4) サロン事業への“参画”

今日は「WEリーグ」をたっぷり語りましょ

事業系のものとしては、毎年 1 月、U-18 年代のフットサルリーグチャンピオンが集まる競技会を、toto の助成を受けて長野県千曲市で行っています。また年 1 冊、広報誌を発行しています。これも toto の助成を受けています。オリンピック教育にも取り組んでいます。

“志”に賛同される方ならどなたでも入会できます。ファミリーの一員になれば、同志との“交流”や、“情報”が得られ、NPO サロン事業への“優遇”や“参画”できることがあります。面白そうだなと思ったら、ぜひホームページからご入会ください！。

申し遅れました。私はNPO 法人サロン 2002 理事長の中塚義実です。筑波大学附属高校の保健体育教師で、異動もなく、定点観測 35 年目になります。顧問を務める蹴球部は、11 人制のサッカーに取り組む男子、フットサルをやっている男子、フットサルをやっている女子のチームがあります。

◆本日の概要

本企画に至った経緯をお話しします。2021 年 1 月、Football conference が開かれました。これは 2 年に一度、サッカーの指導者資格を持っている人がカテゴリーを越えて集まる場ですが、今年は初めてオンラインで開かれ、100 年をいろいろな形で振り返るセッションがありました。

その中で、「ボールはなでしこの足元にも転がった～女子サッカーの発展」というセッションがあり、視聴しました。JFA 女子委員長の今井純子さん、代表監督の高倉麻子さん、元代表選手で JFA 女子副委員長の手塚貴子さん、そして右端には、今日もご参加されている小林美由紀さん。私は愛情を込めてひらがな三文字の別の呼び方をしていますが、このような方々が、日本の女子サッカーのあゆみを、古いところから今日まで語り合いました。女子サッカーは「なでしこジャパン」から始まったのではありません。100 年も前から行われていたし、なでしこの活躍以前にいろいろな方が力を注いでいたことが紹介されました。

画面中央に、この時はアメリカにいらしたと思えますが、WE リーグ初代チェアの岡島さんがおられます。9 月から始まる WE リーグの理念、方向性を話してくださいました。すごくインパクトのあるお話でした。ただ単にスポーツのリーグができるというだけでなく、もっと社会的な意義を持って企画されているのがすごく印象に残りました。チャンスがあれば是非サロンで取り上げたいと思っていたところ、チャンスが巡ってきたわけです。



JFA オフィシャルサイト

「第 12 回フットボールカンファレンスが閉幕」

<https://www.jfa.jp/coach/news/00026249/>

◆岡島チェア紹介

ということで、岡島さんをご紹介させていただきます。このスライドはすべて WE リーグのホームページからの引用です。

出身地は東京都、91 年から現在までアメリカ在住ですが、今は WE リーグ立ち上げで日本に滞在され、今日は神戸からお聞きしています。早稲田大学を卒業してのち、ケミカルバンク、現 JP モルガンチェース銀行東京支店。そのあとも銀行、コンサルタント、そういった仕事を世界的に展開され、2004 年から 2019 年までメリルリンチ（アメリカ）、そして WE リーグへ。

初代チェア 岡島喜久子氏

<p>出身地 東京都 (1991 年から現在まで アメリカ・メリーランド州に在住)</p> <p>◆最終学歴 1983 年 早稲田大学商学部卒業 ※大学 2 年時、 ウェスリアン大学(アメリカ)に 1 年留学 スポーツ医学、コーチング学を専攻</p> <p>◆サッカー歴 1972 年 中学 2 年時に中学校の男子サッカー部に入学。その後 C ジンナンに入会 1974 年 高校 1 年時、東京都サッカー協会主催のリーダースクール(現認 D 級コーチ養成講習会)を女性として初めて受講 1977 年 海外で開催された国際大会「第 2 回 AFC 女子選手権」に FC ジンナンが単独チームで参加 1979 年 日本女子サッカー連盟設立時に初代理事メンバーに就任 1983 年 日本女子代表チームのメンバーとして広州女子国際大会に登録 1984 年 日本女子サッカー連盟の事務局長に就任 日本女子代表チームのメンバーとして西安招待国際女子大会に登録 1989 年 海外転勤を機に引退 1996 年 アトランタオリンピックでサッカー日本女子代表チームのスカウティング業務をサポート</p>	<p>◆職歴 1983 年 ケミカルバンク(現 JP モルガン・チェース銀行)東京支店 1988 年 国際証券(現三菱 UFJ モルガンスタンレー証券) 1990 年 子会社のコクサイシンガポールマーチャントバンク(シンガポール) 1991 年 First National Bank of Maryland(アメリカ) 1999 年 Riggs Bank(アメリカ) 2004~2019 年 メリルリンチ(アメリカ) 前 The Women's Board of Johns Hopkins Hospital Board Member 前 Calvert School Board Member 前 メリーランド州神奈川姉妹州委員会委員長 前 神奈川県国際政策アドバイザー</p>
--	---

やはり我々が気になるのは球歴、サッカー歴ですね。

1972 年、中学 2 年の時、中学校の男子サッカー一部に入部。

実は岡島さんのご講演をお聞きしたことが一度あります。JFA の一室で定期的に行われていた「日本サッ

カー史研究会」で話をしてくださいました。そのときお聞きしたのですが、入部したサッカー部とは、東京学芸大学附属中学・高校です。顧問は、松本好市先生で、私の大学の先輩になります。当時、全国高体連の、主に財務のところを一手に担っておられた方で、その先生が顧問されている男子の部活に入部されたということです。そしてFC ジンナンで活動。日本の女子サッカーの、まさに草分け的な存在として、70年代の、まだ何もなかった頃から道を切り開いてくれました。

なでしこ以降から女子サッカーに触れた方には、「岡島チェアってどんな方なの？」と疑問を持ってもらったかもしれませんが、まさに日本の女子サッカーの最初のところから関わっておられた方なんだということです。

これぐらいのご紹介でよろしいでしょうか。

では、ここから岡島さん、よろしくお願いします。

I. WE LEAGUE for サロン 2002 (岡島 喜久子) < 1st HALF >

1. はじめにー自己紹介



ご紹介ありがとうございました。1977年、先ほど出てきたアジアの大会に私、初めてFC ジンナンの単独チームで参加しました。その時は日本サッカー協会は女子の登録を認めていませんでした。というか、まあ女子は居ないものとして扱われていました。

日本代表で台湾のアジア大会に参加したんですが、日の丸は胸に付けられない、袖につけて日本代表として出ました。シンガポールやタイ、香港など、他国は全部代表チームを出していました。これが私の本当の原点みたいところです。なぜ日本は女子代表チームがないんだろう。それはやはり日本協会に登録できなかったからなんです。

その時は高校生だったのですが、これはやっぱり代表チームを作らなきゃってすごく強く思いました。当時監督をして下さった折井孝男さんが入れ知恵をして下さり、登録をするにはどうすればよいか、女子サッカー連盟を作らなくては行けない。女子サッカー連盟は、私1人ではなく、その当時、三菱重工が女子サッカー部を持っていたので、三菱重工のお力をすごく借りて女子サッカー連盟を1979年に作りました。

その1979年は登録人数が約900名、クラブチーム登録が53ぐらいでした。その時は大学生になっていたのですが、設立にも関わったということで理事になり、その後事務局長にもなりました。最初の事務局長は鈴木良平さんだったのですが、西ドイツでコーチになられたのでいなくなり、当時の理事長だった森健児さんが、「喜久子、お前やれ」ということで、私が事務局長をしたことがあります。

事務局長だったんですけども、全国大会は選手として出ていました。よく覚えているのは西が丘の試合前、アップしてた時に「事務局長ちょっと来てください、緊急なんです」と言われ、私はユニフォームでスパイクのまま事務室に入った覚えがあります。

ということで、今日は私の話ではなく、WE リーグの話をしていただきたいと思います。

2. WE リーグの理念とビジョン

WE リーグのWEというのは、WOMAN ENPOWERMENTということです。



日本はジェンダーギャップ指数で121位とか120位とか、ごく低迷している国ですね。おそらく皆さんご存知だと思いますが、女性の意思決定者が日本にはなかなかいません。政治の世界でも企業のトップでも、女性は非常に少ない。

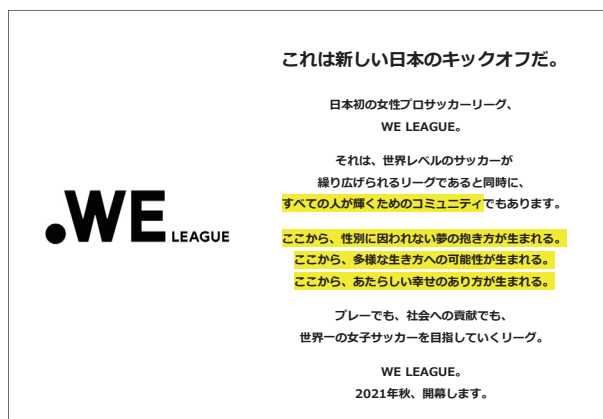
スポーツの世界も同様です。オリンピックの参加選手数は、男子も女子も同じ数でしたし金メダルも女性

がいっぱい取りました。ただ、サッカー協会には5人の女性理事がいますが、協会など団体の理事は非常に女性が少ないです。女子スポーツでも同じです。指導者も女性が少ない。

ということで、やはりジェンダー平等、女性活躍みたいなものをこう易々として作っていくというような社会的な意義を持ったニーズです。

こういった形で、新しいリーグになります。今までプロの女子リーグは日本にはありませんでした。なでしこリーグというアマチュアのリーグがありますし、それは続けてあります。

その中で、去年までプロ契約をしていた選手は数名、10数名。これからたぶん250名がプロの選手になり、これから日本では女子サッカー選手というのが仕事の1つになります。多様な生き方への可能性が生まれる、女子サッカー選手が子どもの夢になるというところで



これは新しい日本のキックオフだ。

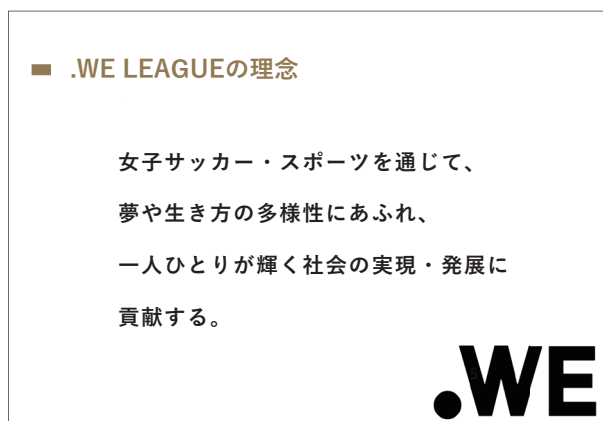
日本初の女性プロサッカーリーグ、
WE LEAGUE。

それは、世界レベルのサッカーが
繰り広げられるリーグであると同時に、
すべての人が輝くためのコミュニティでもあります。

ここから、性別に囚われない夢の抱き方が生まれる。
ここから、多様な生き方への可能性が生まれる。
ここから、あたらしい幸せのあり方が生まれる。

プレーでも、社会への貢献でも、
世界一の女子サッカーを目指していくリーグ。

WE LEAGUE。
2021年秋、開幕します。



■ WE LEAGUEの理念

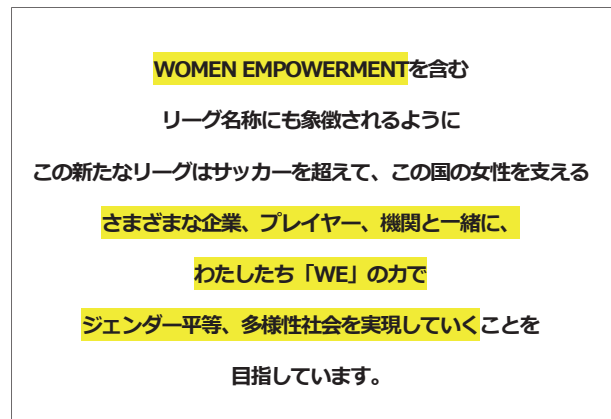
女子サッカー・スポーツを通じて、
夢や生き方の多様性にあふれ、
一人ひとりが輝く社会の実現・発展に
貢献する。

WE LEAGUE

サッカーを超えてということで、実は先日バスケットボール女子日本リーグ会長の川瀬さん、日本女子ソフトボールリーグ機構副会長、キャプテンの宇津木さんと対談する機会がありました。

また、今日神戸にいるのは、先ほど甲子園で女子野球を見て来たからです。高校の女子野球の決勝戦がは

じめて甲子園で行われ、全日本女子野球連盟代表理事の山田さん、野球女子日本代表団長の横井さんなども話をしました。



WOMEN EMPOWERMENTを含む
リーグ名称にも象徴されるように
この新たなリーグはサッカーを超えて、この国の女性を支える
さまざまな企業、プレイヤー、機関と一緒に、
わたしたち「WE」の力で
ジェンダー平等、多様性社会を実現していくことを
目指しています。

基本的に、みんな悩んでることが一緒なんです。ソフトボールは金メダルを取りました。バスケットボールは銀メダルを取りました。これだけのトップレベルであったとしても、やはり普及に問題を抱えている、指導者に問題を抱えている、審判の数が少ない…。今日の女子野球では2人女性審判がいましたが、ほとんどいないと伺いました。

特に普及の部分では、これからどんどん少子化が進んでいきます。ですから、皆さんにお話したいのは、サッカーというか、スポーツをする女の子を取り合いするんじゃないということです。バスケットボールに来てほしい、サッカーに来てほしいというのではなく、パイを広げていかないといけないと思うんです。

これからパイを広げるっていうのは、スポーツをする女の子を増やす。日本でもっともっと増やしていく。それが日本全体の健康にもつながってくるし、日本のスポーツのチームにも、女子スポーツのチームがつながってきます。そういったところを横のつながりを作って、それにスポンサーである企業などを巻き込んで、その流れの中心となるのがWE LEAGUEだと考えています。

WE LEAGUEの理念というのは、女子サッカー、スポーツを通じて、夢や生き方の多様性に溢れ、一人ひとりが輝く。一つのキーワードは多様性ですね。多様性というのは、LGBTQ。私たちはLGBTQをやはり大切にしていきたい。そのコミュニティを大切にしていきたい。女子サッカーに関わるLGBTQの選手たちも、ちゃんと自分らしく生きられるようにしていきたい。

サッカーは元々の男の子のスポーツでした。日本で



は特にそうでした。それを女子がやるということで、「女の子なのに」という気持ちがあった人がいっぱいいます。さらに、男らしいスポーツをすることで、割と男っぽい女の子が集まっているからLGBTQも多いです。ほかのスポーツに比べて受け入れられているところがあります。多様性ということにはもちろん、支える方、見る方には障がい者の方にも来ていただきたいということもありますけれども、LGBTQのところも大切にしていきたいと考えています。

理念やビジョンをわかりやすく示しました。一番上に理念「女子サッカー・スポーツを通じて、夢や生き方の多様性にあふれ、一人ひとりが輝く社会の実現・発展に貢献する」ことが掲げられています。左側の社会事業が「世界一アクティブな女性コミュニティへ」。これが社会に変化をもたらす動きをしていこうというところです。右側にサッカー事業、これはやはり「世界一の女子サッカーを」ということで、なでしこジャパンをもう一度世界一にするということを目指しています。この中にはもちろん普及のことも含まれます。この2つの両輪を使って、最終的には「世界一のリーグ環境を」。事業基盤として確固たるものにしていく形です。まだ世界一のリーグとは全然言えません。いまはやはりヨーロッパやアメリカが進んでいると思います。そちらに行けるような形でリーグの発展を考えていきたいと思っています。

WE リーグでは、具体的にリーグの目指す姿を考えて、中長期計画を立てるようにしています。今年2021年は、まずはリーグを認知してもらい、サポーターを増やしていったり、事業基盤を確立させたりというところがあります。将来的にはやはりジェンダー

平等というのが、2030年には普通のことになっていて、普通になった根幹に女子スポーツがあると。女子スポーツが子どもたちの夢になるような形を考えています。小学生のなりたい職業、女の子のなりたい職業をみますと、一位が芸能人、二位がユーチューバー、三位がお菓子職人なんですね。9位ぐらいに小学校の先生が入ります。やはり目立つ、みんなが憧れるような職業、芸能人みたいな感じなんです。男の子だとJリーガーが上位に入ってきます。

3年後、5年後には、WE LEAGUE が、女子のサッカー選手が、夢の職業の一つに入ってほしいと考えます。スペインはプロ化して数年経ちますが、5年目には、スペインの女の子のなりたい職業の一つに、5位とか6位だったと思いますけど、女子サッカー選手が入ってきました。ですから夢ではない。できれば女の子の憧れの職業になるようなところを目指していきたいと思っています。

3. WE リーグの構成・構造

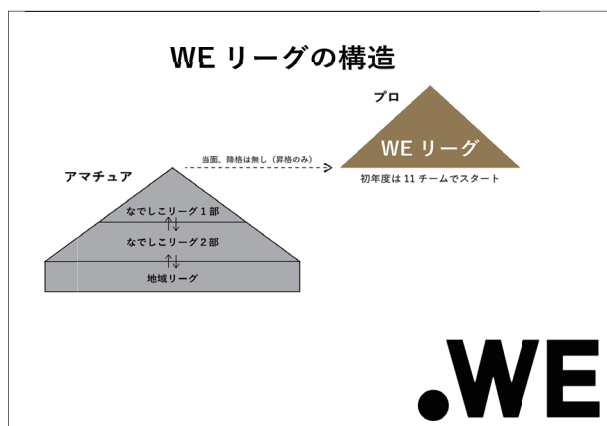


サッカーの方でいきますと、今年は11チームで始まります。右上のマイナビ仙台というのは仙台のチームで、浦和、大宮、熊谷と埼玉県に3チームあります。千葉、東京、神奈川、左側にいきますと新潟、長野、そして神戸とサンフレッチェ広島レジーナ。このうち8チームが男子のJリーグのクラブが持っているというかかわりがあるクラブです。全く男子チームを持たないクラブが三つあります。それがTNAC 神戸レオネッサ、ちふれASエルフェン埼玉、ノジマステラ神奈川です。新しくできたチームは2つあり、大

宮アルディージャヴェントスというJリーグのクラブが作った女子チームで、サンフレッチェ広島レジーナも、サンフレッチェ広島が作ったクラブです。

なぜ11クラブなのか。10でも8でもなく、と言われることが多いです。まず参入基準を出してクラブを募りました。17団体が参入を希望されました。3～4回審査委員会を開いて審査をした結果、11までは割と簡単に決まりました。11のうち3落とすかひとつ落とさかとなった時に、票がすごく割れました。この11クラブ全部が魅力があり、もちろん参入基準も満たしており、財政的にもしっかりしたクラブです。最終的に11クラブでいきましょうと決めた経緯があります。

サッカーは2チームずつ試合をやりまますから、1クラブは毎週あぶれます。その1クラブは「理念推進日」ということで、理念推進活動をしていただきます。これは、各クラブや選手が決めてもらうのですが、はじめは地域の小・中学校に行ってサッカー教室をするのもいいのですが、将来的には地元のコミュニティを活性化する、地元コミュニティの貢献になるような活動するようお願いしています。その根底には、ジェンダー平等という理念を作っていく過程で、選手がそのままコミュニティと関わることで、セカンドキャリアにも繋がると思いますが、そういった経験ができることでお子さん達と話すことで発信力も出てきます。そして、お子さん達と触れ合うことで試合会場に来てもらうような取り組みもできるかなと思っています。



WE LEAGUEの構造ですが、先ほど言いましたようになでしこリーグというのはまだあります。なでしこリーグがアマチュアのリーグですね。なでしこリーグ1部2部があって、その上というか、別構造としてWE LEAGUEがあります。当面、降格はなしで、なでしこリーグから優勝チームが自動的に昇格するというわけではなく、これから数年は参入基準を満たし

たクラブについて審査委員会は審査をし、参入を決める形になります。なでしこリーグを経ずに、地域リーグから参入されても構いませんし、全く新しいクラブは大宮アルディージャヴェントスのように、Jリーグのクラブがまったく新しい女子チームをつくるという可能性もあるでしょう。

4. 日本の女子スポーツの課題

日本の女子スポーツの課題

1. 女性指導者の少なさ

選手の自己効力感の低さにつながる

2. 競技団体の女性役員の少なさ

「社外取締役」

3. 学校教育中のスポーツ

遊びがない、拘束時間が長い

上下関係

4. 少子化で子供の数自体が減少

日本の女子スポーツの課題ですが、女子野球、バスケットボール、ソフトボールのトップレベルの指導者と話をすると、だいたい皆さん同じような課題を感じておられます。指導者の少なさ、競技団体の女性役員の少なさ、学校教育中のスポーツの限界ということ

です。女性指導者が少ないのは、サッカーは男性のスポーツでしたので、サッカー選手の中から指導者が出てくると、競技人口がそれほど多くない女子の中で女子指導者がそれほど多くないのもやむを得ないことではあります。いま、S級ライセンスが最上級の資格ですが、男子が500人で女性は9人です。

選手の自己効力感の低さに繋がるのは、男性の指導者はどうしても男女を比べてしまうんですね。男子と女子は当然キック力が違います、走る速度も違います、筋力も違います。男子だったらここまでできるのという意識が態度に現われたり口に出てしまったりすることが多い。それが効力感の低さにつながってくるかなと思います。Jリーグのクラブだと、「上位リーグで稼いだお金で女子をやってあげている」というような態度や言葉がどうしても出てしまうので、女子選手は肩身の狭い思いをしてきたところがあります。

競技団体の女性役員は、少ないです。私はサッカーをしてました、今井委員長も小林美由紀さんもサッカーをしてました。サッカーをしてた人が理事に入ってくることはありますが、他の競技団体を見てみると、

そういう人はごく一部。いわゆる社外取締役、社外取締役はもちろん、別の業界からくる方は数合わせで入れることが多い。もちろんそういった方は、他の業界での知識、知見がありますから貢献して頂くのですが、社外取締役はあるけれども、プレーをしてきた人は少ない気がします。

学校教育の中でのスポーツは、拘束時間が長く、遊びの部分がないということ、私はアメリカのスポーツを見てきたのですごく感じます。アメリカも教えちゃうところがあるんです。そうすると、スペイン、メキシコ、ブラジルのように、遊びから来た選手の創造力には負けるところがあるんじゃないかと考えます。また上下関係は、日本の共通の課題として克服したいところだと思います。私はクラブチームで育ってきたので上下関係はあまりなかったのですが、学校においては上下関係が厳しいところはあるかと思っています。

全体的にみて、やはり少子化で子供の数自体が減ってきていますね。先ほども言いましたが、パイを取り合うんじゃなくて、女子スポーツ全体で同じような課題を抱えているので、パイを大きくしよう。中学校でクラブ活動としてやってほしいし、クラブ数、女子のスポーツ人口、女の子がスポーツをする機会を増やして行きたいなと思います。

5. WE リーグの取り組み

1) 指導者資格の取得

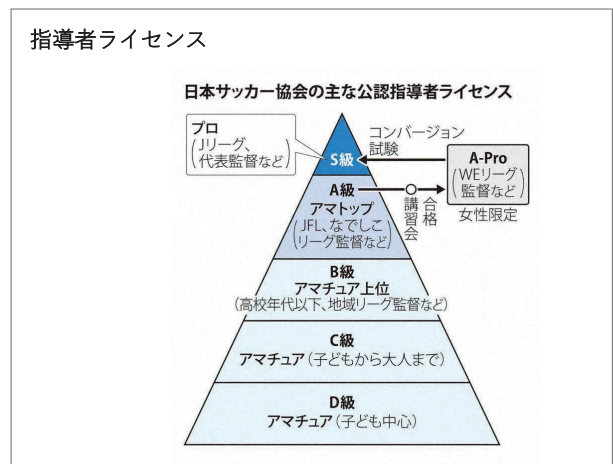
WE リーグでの取り組み

- ・ 参入基準段階でのリクエスト
 - ・ クラブの役職員を50%以上女性
 - ・ 意思決定をする役員に必ず女性を1名入れる
 - ・ コーチングスタッフに必ず女性を1名入れる
 - ・ 試合会場に託児所を備ける (数年の猶予あり)
 - ・ クラブに理念担当者の設置 (理念推進部: empowerment division)
- ・ 意思決定者養成
 - ・ JFA/WE リーグ主催 女性リーダーシップ研修
- ・ 指導者養成
 - ・ C級ライセンスは選手全員が受講
 - ・ Aプロライセンスを創設

WE LEAGUE ではどういう取り組みをしているかというと、まず参入基準でのリクエストとして、クラブの役職員 50% 以上は女性、意思決定をする役員に必ず女性一名。コーチ・監督に女性一名、あとは試合会場に託児所を設ける、理念担当者をクラブに設置することを掲げています。もちろん WE LEAGUE の中にもクラブ理念推進部があります。こういった形で、クラブそのものが将来の女子選手のセカンドキャリアの受け皿になって欲しいという気持ちもありますし、意思決定者の中で多様性を持っていただくことで、いろんな意見を出してほしい。ジェンダー平等を掲げてい

るので、意思決定者に女性を入れてほしいですね。

そのためには、JFA と WE LEAGUE が主催して「女性リーダーシップ研修」を行なっています。第一回はもう終わっていて、いま第 2 回に入っています。その中でジェンダーの話をはじめ、リーダーになるためいろいろな講師をお呼びしてお話をしてもらっているところです。選手にとっては指導者になってほしい。全員が全然ならなくてもいいんですけども、C 級ライセンスは選手のうちに、全員がとってもらう形にしています。プロライセンスも創設しています。



これがサッカー協会の指導者ライセンスの形です。S 級がトップ。S 級になると、Jリーグ、WE LEAGUE、代表監督などの監督になることができます。その下に A 級 B 級 C 級 D 級がある。選手全員が取るのは下から 2 番目のライセンスです。選手であるうちに取ってもらいます。もちろん選手のうちに B 級まで取ることは可能だと思います。その後、A 級になって監督になってほしいという気持ちがあります。いま、A 級に「A プロライセンス」を新しく女性限定で設定しました。私が設定した訳じゃなく、サッカー協会が設定してくださいました。講習会をして合格すると、A プロというタイトルが使えて、WE LEAGUE の監督になれます。女性限定で。S 級のコンバージョン試験を受けて S 級になることができます。さっきも言いましたが、S 級を持っている男子は 500 人、女子は 9 人です。なるべく女性を増やしていきたい気持ちがあります。

• 選手のセカンドキャリア

- JICAとの取り組み、アジア指導者派遣
- JFA アジア貢献事業
- 河本菜穂子(モンゴルU-17、U-20代表監督)など
- 代表選手クラス：経団連の企業でのインターンシップ

• 選手のプロ意識と理念推進

事務局に理念推進部 各クラブにも理念推進担当

WEリーガー研修

選手によるクレド（行動規範）作成

「WEミーティング」

• ダイハツと一緒に各地でサッカースクール

子供が選手と接触する機会を増やす

2) 選手のセカンドキャリア

WE LEAGUEとして取り組むのは、セカンドキャリア。選手である期間は限られています。セカンドキャリアを、なるべく道筋を作ってあげたいと考えています。JICAとの連携で、アジアへの指導者派遣というアジア事業に取り組んでいます。サッカー協会はアジア貢献事業を行っていて、アジア各国に指導者を派遣しています。それは、アジア全体のレベルが上がることで日本のレベルも上がるということです。例えばワールドカップ予選やオリンピックの予選で真剣勝負をしますが、そこでレベルの高い試合をすることで、本大会での力が作られていくと思います。

今回までしこジャパンは、強化試合がなかなか出来ませんでした。コロナの影響です。強化で来ていただいたのはウルグアイ。8-0でした。それとメキシコ。ちょっと力が弱いところになってしまったんですね。そうするとやはり本戦のところでなかなか難しいところがあります。

FIFAも女子サッカーを発展させようとして、女子サッカーをやる国には50万ドル、大体5,000万円余りのお金を出すことになりました。そうすると、今まであまり女子のサッカーに取り組んでこなかったアジアの国が、5,000万円もらえるんだったらやろうということで、取り組みを始めます。しかしその国には女子の指導者はそれほどいません。宗教的な理由、特にイスラム教の国などは、文化的な要素で、男性指導者にサッカーを教えることが欲しくないという親御さんがいっぱいいます。そうすると、やはり女性指導者が必要になってきます。アジアの中ではサッカー先進国である日本に、指導者の派遣要請が最近とても多く来たと聞いています。出来れば2年でも3年でも海外に行って指導者になってほしい。そうすると社会的な経験を積めると思います。すでにモンゴルや台湾、タイに女子の監督、コーチを派遣しています。

あとは代表選手クラスですけれども、引退したらサッカーをやりたくないという人は、経団連と話をしているのですが、企業での社長秘書室みたいところで1ヶ月とか2ヶ月インターンシップをしてもらいたいというように、経団連にお願いをしているところです。

• 選手のセカンドキャリア

- JICAとの取り組み、アジア指導者派遣
- JFA アジア貢献事業
- 河本菜穂子(モンゴルU-17、U-20代表監督)など
- 代表選手クラス：経団連の企業でのインターンシップ

• 選手のプロ意識と理念推進

事務局に理念推進部 各クラブにも理念推進担当

WEリーガー研修

選手によるクレド（行動規範）作成

「WEミーティング」

• ダイハツと一緒に各地でサッカースクール

子供が選手と接触する機会を増やす

3) 選手のプロ意識と理念推進

プロ意識のところですが、WE LEAGUER研修で、プロ意識を持ってもらうために、Jリーグの選手などにお話をしてもらったりしています。

あとはクレドという行動規範を作ることになっています。次のスライドでお話します。

あとはダイハツと一緒に各地でサッカースクールをするということで、子どもと選手が接触する機会を作ります。



Credo ～クレド（行動規範）

- 各クラブから代表1名で3回のミーティング
- 宿題として各クラブで相談
- 「私たちは将来を担う子供達に『???』を約束します」
- 夢、希望、お手本、あこがれ

➡ 選手宣誓のような形で、開幕戦で発表

これがWE meetingという、クレド（行動規範）を作るミーティングです。各クラブから選手を一人出

してもらい、11クラブの選手が集まります。私もオンラインで参加しました。3回のミーティングを経て、宿題を各クラブに持ち帰ってもらい、自分たちのクラブの中で相談してもらいます。例えば「私たちは将来を担う子どもたちにちゃんと、なんとかなんとかをお約束します」と。「なんとかなんとか」の部分を選手中で相談し、次の時に持ってきてね、という宿題です。その答えとしては、夢や希望やお手本から、私たちは将来を担う子どもたちの夢になります、夢を約束します、憧れを約束します、みたいなことを、話し合ってきた言葉を持ってきてもらいました。

実はもうできているのですが、まだ発表していません。開幕戦で選手が選手宣誓のような形で発表することを考えています。

II. ハーフタイム 質疑応答

中塚:話を聞いていただいておりますが、女子サッカーのプロの全国リーグが始まるだけではありません。サッカーだけでなくいろんなスポーツへ働きかけ、女性の地位向上、社会課題の一つとしてのジェンダー平等に取り組む大きなプロジェクトだということです。

ここまでのところでご質問等いただければと思います。

さっそく張さんからチャットに質問と意見がありました。「なぜ今まであったなでしこビジョンとは別に、新たに設定しなければいけなかったか」。この質問に加えて私の方からも、2011年になでしこが世界一になりました。あの時のインタビューだったと思いますが、次はなでしこリーグを見に来てくださいと言っていた選手がいたと思います。一時的には盛り上がりましたが、なかなか持続しない。もしかするとその辺りが一つの動機になって、単に女子サッカーのプロリーグを作るだけでなく、プラスアルファのメッセージを込めた今回のリーグにつながったのかなという気がしています。どうでしょうか。

張さんから、ご質問の趣旨を、私が添えたことも含めてコメントいただけますか。

張:ありがとうございます。スフィード世田谷の張と言います。いま中塚さんがまとめてくださったとおりです。僕の最初の質問は、WEリーグの理念は別

に悪くないし、これはこれで一つの形になると思いますが、あえて新しいものを作って、どこに違いがあるのだろうということです。この説明が今まであまり聞く機会がなかったので、今日お聞きしたいと思った次第です。

岡島:私はなでしこビジョンに全然関わってないので、あまりよくわからないんですが、WE LEAGUEがなぜこのようになったかという、やはりある程度、スポンサーを集めるのがすごく大切なことだったんですね。スポンサーを集めるためのパートナー企業、理念に賛同してもらうパートナーを集める。その際、女性活躍という文脈が、今の日本ではすごく大切なことになってきます。特に女子サッカーは、男子のスポーツであったところに女子が入ってきた。なので差別を受けていた時間が長いんですよ。そういう基盤があるので、女性活躍とかジェンダー平等とか、女性が男性社会で活躍していく意味を問えるスポーツなんです。ジェンダー平等、女性活躍を推進していくリーグという形で、スポンサーに話を持って行きやすかったというところが、すごく大きなところですね。2011年にプロリーグを作ろうと思っても、たぶん用意ができてなかったというのはあります。企業が女子スポーツに投資していく気持ちは、まずその時点ではなかったと思います。ただあの時、なでしこジャパンが優勝して注目されました。女子スポーツ界にとってとても大切だったことは、女子スポーツ選手の待遇がすごく悪かった。みんなアルバイトをしながら、仕事をしながらサッカーをしていました。それでも世界大会に勝ってきたんですね。待遇が悪い中で勝ったことが注目されて、女子スポーツの待遇がすごく悪かったというのを広く知らしめたという意義はとても大きかったと思います。ただ、やはり時期的には、企業が長く投資する用意ができていなかったところがあります。ですから、そういった意味では、説得力のある形でWE LEAGUEの理念を考えて、そこが出発点ではないですけれども、社会的な意義を前に出すことによって、スポンサー企業が賛同してくれたところがあると思います。「なでしこビジョン」は、基本的には女子サッカー全体のことですよ。リーグというわけではなく。すみません、「なでしこビジョン」というのが、ちょっと全然わかんないんですけど。

張:簡単だから、じゃあ紹介していいですか。3つあっ

て、1)サッカーを女性の身近なスポーツにする。2)なでしこジャパンが世界のトップクラスであり続ける。3)世界基準の個を育成する。そして女性が輝く社会をつくる。

岡島：なるほど。

張：ということで、まあそんなに違わないような気もするんです。

岡島：なるほど。もう一つ、すごく大きな違いは横の繋がりで。他のスポーツとつながっていく。さっきも言いましたけど、女子スポーツって同じ課題を抱えているんですね。なでしこビジョンって言うのとどちらかというサッカーの世界だけじゃないですか。だからここで他のスポーツを巻き込んでいこうというところがちょっと違うかな。でも基本的にはそんなに違わないですね。

小林美由紀さん、何か足すことありますか？

小林：はい。小林美由紀です。ご無沙汰の方もいらっしゃると思いますけれど、中塚さんの話の中ではみーみですのでよろしくお願ひします。いまWEリーグの方で理念推進を担当しています。「なでしこビジョン」っていうのは日本サッカー全体のビジョンです。目指すものは同じですけど、WE LEAGUEは、サッカーの選手がサッカーでお金をもらうことで社会を変えられるという論理だと思ひます。なので、新たに作ったというか、目指すものは同じですけど、一人ひとりが輝く女子サッカーのダイバーシティのところも合わせながらやっただと。それが私の解釈です。

中塚：より社会課題に近い形で再生されたと、一言で言うとなでしこということですか？

小林：はい。そういうことです。

中塚：ありがとうございます。その関連になるかもしれませんが、菊地さんから質問があります。すぐに答えてもらえるかもしれないので、菊地さんの口からお願いします。

菊地：こんばんは、菊地と申します。ヨガのインストラクターしております。私はサッカーを全くやった事

がなく、WE LEAGUE のことも全く分からずに、予習をしてから今日この会に参加しました。だからWE LEAGUE のWE の訳とか、そういうのも勉強してから参加させて貰っています。WE LEAGUE のWがウーマンでEがエンパワーメントの意味じゃないですか。エンパワーメントとは、能力強化と訳されることが多いんですけど、能力強化と言うと、少しマイナスなイメージがあるなと思ひました。たぶんもっと違う言葉があるのではないかな。岡島さんが思ひエンパワーメントの訳みたいなのって何かあるのかなと思ひて質問させていただきました。

中塚：続けて山内さんから、おそらく同じような趣旨の質問が届いています。浦和レッズの山内さん、どうぞ。

山内：浦和レッズの山内です。今の菊地さんの質問に似ていますが、どうもJリーグもWE LEAGUE も横文字が多いと思ひます。横文字は、その人の取り方、解釈によって全く違う意味にもなりえます。私たちは日本人なので、日本人に伝わる言葉を使ってほしいです。例えば、今のエンパワーメントですが、エンパワーメントとはWE LEAGUE ではこういう意味で使っていますと明確にして伝えていただきたい。受け取った人々がそれぞれが違う解釈してしまうということが一番怖く感じています。その辺、統一見解をいただければと思ひます。

岡島：わかりました。ここも理念推進担当の小林美由紀さん、どうですか？ 理念推進部は英語でエンパワーメントディビジョンって言うんですよ。

小林：エンパワーメントって、先ほどご指摘があったように難しいですね。それを能力強化というとなでしこと思うので。エンパワーメントという言葉自体はすごく難しいのですが、ジェンダーなどの世界ではよく使われています。だから使ったという訳ではないんですけど。今回のWE LEAGUE R研修で全員に向かってやっただのは、エンパワーメントという言葉でエンとパワーとメントに分けて考えました。パワー。選手、まあ、女性には多いんですけど、選手が全く自分のいいところとか自信とかがないので、まずは自分のパワーを見つけてましようというのをテーマに実施しました。パワーというのは自分の良いところ。自分が伸ばせる自分の良いと

こですね。それはサッカーでもいいし人間的なところでもいい。何でもいいんですけど、そのパワーを、エンっていうのは力をつけるということなので、そのパワーをまずは自分でつけて、自分で見つけて、それを伸ばしていくことで、より自信を持つ。自信を持っている人が周りの人をもっと、例えば心が豊かになったり、これでいいんだと思ったりっていうようなエンパワーされるんだっていう解釈をしています。そのパワーは何でもよくて、そういうみんながサッカーの中で元気に、自分の自信を持ってやっていることで、ほかの人たちがエンパワーするっていう。カタカナ使っちゃってるんですけど。そういう新しいエンパワーっていう言葉で、日本語だと表現しにくいところを表現しようとしています。本当だったら、岡島さんもよく言ってますけど「女性活躍」じゃないよねと。女性だけのことじゃない。でも、女性が力をつける。この、男性のドメインであるサッカーという中で、女性がすごく輝いていることを見せることで、ほかの女性たち、もちろん男性たち、いろんな人が力をつける。つけて元気になって生き生きとできるということがエンパワーメントかなと思ってるので、そういう解釈で使っています。もちろん日本語にできるのであればというか、本当は見つけなきゃいけないのかもしれませんが、そういうことで、ウーマンエンパワーメントとのエンパワーメントは、選手でそうやってエンパワーメントっていう言葉を自分で解釈して、まわりをパワーメントしていきましようっていう話をしています。

中塚：山内さん、菊地さん、よろしいですか？

山内：すみません、私は、通訳をしているので、言葉、伝えるというものを大切にしています。今おっしゃられた説明を聞いた報道関係者の方々は、10人いたらそれぞれの解釈で報道します。そしてそれを受け取った人たちが、またそれぞれが違う解釈する。ということは、WE リーグのエンパワーメントとは何という話になってしまい、WE リーグが主張しているエンパワーメントとはどういう意味なのか伝わらないと思います。

9月に埼玉県内の女子高の2年生にSDGsについてお話をする機会があるので三菱重工浦和レッズレディースとWE リーグについてお話ししようと思っておりますが、今の状態では生徒さんたちには伝えら

れません。WE リーグとは何、そしてエンパワーメントとはこういう意味だというのが欲しいです。

岡島：やはり自分に自信をつけるというのが一つあると思うんですね。私はアメリカから見ていると、日本人の女性の自己肯定感がすごく低いのが気になります。自己肯定感が低いというのは、例えば具体的には、上司から昇進の問い合わせ、昇進して次のポジションに行ってみないかと言われたときに、いや、私なんてとてもとか、もう出世したくないですとか、そういうふうになってしまう女性が日本は多いです。アメリカに比べるとすごくすごく多い。それってやっぱり自己肯定感がないからで、自分に自信がない。自分に自信をつけてもらうっていうのがあり、エンパワーメントの根底にある考え方だと思うんですね。だから、自分に自信があれば、次のポジションにもチャレンジしていけるし、自分が思った通りの生き方ができる。それを普通にできるような社会というのが、女性がエンパワーしている社会であると私は捉えています。やはり自分に自信をつける、自分が思ったように発言したりすることができる。そういう能力ができてくることが、女性がエンパワーメントするということ。

あとはもうちょっと次の段階に行くと、やはり意思決定をする社会の中で、意思決定をする力をつける。もう一段階、社会に対する自信を持った人が、社会の中で、または組織の中で意思決定をする力を持つというのがエンパワーメント。

中塚：議論している中で、先程の菊地さんから「可能性」という言葉がチャットの方に書かれました。そのようにも受け止められますね。

中京大学の來田享子さんがこの件でコメントされています。「日本スポーツとジェンダー学会」の会長をなさっており、オリンピック・パラリンピック組織委員会にも、森喜朗前会長のごたごたのあとで女性理事として入られ、積極的にコメントを社会的に発信されている方です。來田さんからこの件でコメントいただけないでしょうか。

來田：岡島さん、ありがとうございます。大変興味深く拝聴させて頂きました。ジェンダー関係の分野では、どうしてもカタカナ語で通用してしまっているところがあると思います。ご質問にあった「エンパワーメント」は、岡島さんのお返事にもありました

が、場面によって、働きかけが違ってくる言葉だろうと思います。例えばイスラム圏などにみられるような宗教的な制約によって外に出て行くことすらなかなかできないような女性たちに対するエンパワーメントと、それよりはジェンダー平等が達成されているような場所で女性のリーダーシップの能力を高めたり、意思決定者としての役割を果たせる社会をめざすために語られるエンパワーメントは、働きかける方向、とられる方策、働きかけの結果の評価やその方法は異なります。なので、なかなか一様に説明するのが難しいんじゃないかと私は思っています。ひとまず子どもたちにわかりやすく説明する言葉としては、チャットに書いたんですけど、その人らしさ、あるいはその人の能力を開花させる、花開かせるという、という説明で伝えることが出来たらわかりやすいかな、と思いました。

中塚：ありがとうございました。菊地さんが言ってくださった「可能性」とも繋がってくるかもしれないね。

岡島：来田さん、ありがとうございます。聞いていただいととても光栄です。

中塚：議論をもう少し続けます。東急の宇留間さんからの質問が2点あります。宇留間さん、直接お願いします。

宇留間：東急の宇留間と申します。まず純粋に、どういう国をベンチマークとしてみるべきかというのを考えた方が、男性サッカーとの比較においてもわかりやすいと思います。本当にアメリカやヨーロッパ諸国が、日本と、この前のオリンピックを拝見する限りは多少差がついたように見えますが、本当に普及と連動してるかどうかということが疑問の一つ目です。二つ目も連動しており、普及をまず目指すのであれば、11人制はやはり社会人になればなるほど人を集めるのが厳しくなってきます。いろんなプライベートを抱えながら、サッカーと仕事、生活を両立させることを考えた時、やはり女性の方のほうが制約が大きいことを考えると、できるだけ少人数でもできるような接点を持つことが良いのではないかと。フットサルであれば、年代の差がある意味なくなってきますので、普及というのはすごく接点が増えるんじゃないかなと思います。そういった

普及のさせ方は、いろんなことをうまく見ながらやるのが重要で、普及させていくってということが先決ではないかと、今までの話を聞きながら思いました。

岡島：ありがとうございます。まず一つ目は各国のチームの強さと普及度ということですね。まず普及度でいきます。アメリカは長いこと女子サッカーのトップの地位を保ってきました。アメリカの女子サッカー人口はだいたい160万人ぐらいで、日本は59,000人。非常に大きな差があります。ヨーロッパ全体はちょっと数字がわかりませんが、かなり普及してきています。強さでいうと、やはりプロリーグというものが非常に大きな意味を持っています。おそらく皆さんご存知だと思いますが、ヨーロッパは、トップのクラブ、バルセロナとかチェルシーとかアーセナル、マンチェスターユナイテッドとかが、女子にお金をかけ始めています。すごくかけています。それによって強化をし、世界中からいい女子選手がヨーロッパに集まってきています。スペインも、ラ・リーガのチーム全部が女子チームを持っており、スペイン政府が女子サッカーを進めている形になっています。ですからスペインはすごく短期的にトップチームの力が高まった国だと思います。普及もありますけど、プロリーグの存在というのが強化には大きな力を持っていると考えます。今回の五輪でなでしこジャパンがベスト8で終わってしまいましたが、これは今までの集大成の結果です。私たちはWE LEAGUEが始まる今年から、2023年のワールドカップ、2024年のパリオリンピックを見てください、というふうにお伝えしています。

普及の方ですが、大人はやはりフットサルがいいと思います。子どもも、はじめは少人数からスタートすればいいんですが、女子サッカーの場合、特に中学生年代ががたんと減ります。野球もソフトボールも同じで、中学校に部活がない。小学校の時は男子と一緒に野球やソフトボール、軟式野球をやっている、中学校になるとクラブがない。私たちが考えるのは、中学校で女子サッカー部を作っていないとなかなか普及につながってこないということです。一つの対抗策というか施策としてサッカー協会が決定したのは、2023年から国体で少年女子が始まります。16歳以下ですから、高校1年生と中学3年生が参加できます。それによって中学校が女子のサッカー部を作ってくれないかなという期待

があります。今日、女子野球連盟の方とお話ししましたが、やはり皆さん同じです。中学校でクラブがないと、という気持ちがあるので、横のつながりを持って対応していきたい。文科省にもっと女子のクラブを作るよう働きかけるようなことができないかと考えています。中体連、サッカー協会もそうなんですけど、中体連は独自の考えをお持ちで、私たちの方から女子のサッカーを進めて欲しいと言っても、事情もあるし、教員でコーチをする人がいないということもあって、なかなか作っていただけない状況が続いています。そこの部分は非常に重要なので、これからも努力して中学生、あるいは小学生からつながる中学生の女子サッカーを続けていきたいなと思います。社会人になれば、おっしゃるとおり、フットサルが入門としてはとてもいいと思いますが、やっぱりそれはトップにはつながってこないでしょうね。大人になってから始めると、どうしてもなでしこジャパンには行けません。なでしこジャパンを強くする、世界レベルに繋げていくには、小学校、中学校でちゃんとプレーする環境を作っていくてはいけないと思います。

中塚：宇留間さんは東急で東京都のユース年代のフットサルを支援してくださった経緯もありますよね。

宇留間：グループとしても東急レイエスというサッカーチームを持っていたりして、小学校年代から社会人まで、一応街づくりとサッカーをということいろいろやっていたこともあったので。やはり女性の活躍ということについては、当社が行っている事業フィールドから見てもすごく後押ししたいなと思います。その中で、女性ならではの難しいところもあるんだろうなと思い、すごく関心があって今日に参加した次第です。

中塚：ありがとうございます。

岡島：フットサルチームって結構ありますか？

宇留間：フットサルはあると思いますね。あと個人的には、やはり親の理解がないとお子さんがサッカーを始めたり継続するのが女性の場合は難しいんじゃないでしょうか。親との距離感が男性よりも女性の方が近いと思います。親の理解を促す意味でも。親の世代とか、そこに至るまでの各年代の方々と接点

を持つのが必要ではないかと思います。

岡島：そうですね。親の理解、あと親の協力はやっぱりとても大切です。とくにチースポーツを行うメリットを親御さんに理解していただくことは必要だと思います。私は、中学生からですけど、サッカーをやっていたことがビジネスに役立つことがとてもありました。具体的に言いますと、チームワーク。自分が、その仕事が、会社全体の利益につながるとみる。自分そのものが、自分の仕事そのものが評価されなくても、自分の仕事が会社の利益につながるのであれば、納得できるとか、まあ自分の気持ちが高高兴兴になれるというところが一つ。あとは負ける経験。絶対どんなチームでも負けますから。負けた後でも次がある。なんで負けたのか、負けないためには何をすればいいのかと課題発見になりますよね。負ける経験を積むことによって、どんどん強くなっていくわけです。アメリカでもやはり、スポーツやってない人だと、一端負けてしまうと、例えばプレゼンが通らなかつたり批判されたりすると、しゅーっと消えちゃう人とかいるんですよ。だからやっぱり負けた経験はとても大きかったかなと思います。そういったところを、女の子がチームスポーツをやる意義、それが社会人になってどのようにプラスになるのかということは伝えていく方がいいと思います。

あとアメリカのケースで「タイトルナイン」。1972年に施行された法律ですが、公立学校で男子と女子が同じ金額を使わなくてはならない。それが女子サッカーとラクロスにすごく大きな恩恵をもたらしました。というのは、男子のバスケットボール、アメリカの大学バスケットボール、大学フットボールは、テレビ放映権が、ものすごい金額が大学に入ってきます。大学そのものではなく、テレビに出た大学が所属しているリーグに入ってくるのです。そしてリーグに参加している大学に分配されます。その分配された大きなお金を女子にも使わないといけないという法律です。それまでは個人スポーツの、例えば体操だったりテニスだったりしかなかったのですが、タイトルナインのおかげで女子の大学スポーツが、大人数でお金を使えるサッカーやラクロスに広がっていきました。そして大学がどんどん女子サッカーチームを作っていたという経緯があります。親が娘にサッカーをさせると、大学で奨学金がもらえます。アメリカの大学は学費がもの

すごく高いんです。今ですと私立のすごくいい大学で65,000ドル、一年間に700万円近い金額がかかります。それがタダになる。というのは金銭的なメリットがとても大きいので、親が本当に目の色を変えて子どもにサッカーなりラグロスなりをさせる。陸上でもテニスでも何でもいいんですが、このような構図ができています。だから、親が子どもにスポーツをさせる具体的なメリットがあるということを知らせていくのも大切なという気がしています。

中塚：ありがとうございます。もうひと方だけ。質問というか、自己紹介も含めてコメントをいただき後半戦に入りたいと思います。安藤裕一さん、いらっしゃいますか？ 岡島さんの中学、高校の後輩でもある安藤さんからコメントをお願いします。

安藤：安藤と申します。私も高校では松本先生には大変お世話になりました。高校当時サッカー部の友達から岡島さんの話を聞いていたのを覚えています。今このような素晴らしいポジションに着いて、とても頼もしく思います。

コメントさせていただきたいのは、「世界一」という言葉がありましたけど、僕自身としては世界一強いのももちろん大切だと思いますが、女性アスリートとしてすごく魅力的なリーグ、それはサッカーを好きなだけできるんじゃなくて、そこで生活をする中で、人として豊かな生活ができて次のステップに役立つ、つまりWE LEAGUEで経験したことが後の人生に生きたとか、素晴らしい人たちと出会うことができたとか、そういう（外国人選手にとって）夢のある環境というのをぜひ目指してもらえたらいいなと思ってコメントさせてもらいました。

ごめんなさい、自己紹介するのを忘れていました。ハンドボールやっていたんですけど、GMSS ヒューマンラボという会社を作り、スポーツドクターをやっています。スポーツ環境や指導に関心を持っています。先程「自己肯定感が弱い」選手が多いといったことを岡島さんが話されましたが、女子サッカーだけじゃなく、日本の教育全体の問題でもあると思います。そのあたり（選手や若者の自己肯定感を伸ばす）上手な思想がどんどん普及すればいいなと思います。

岡島：世界一魅力的なリーグをもちろん目指していませんけど、実はこれから発表していきますけど、外国人選手がWE LEAGUEに入ってきます。その外国人選手たちは、もともと日本が好きという選手も多いのですが、やはりWE LEAGUEがこうやってはっきりと社会的な意義を持っているところに価値を見出して来ていると聞きました。ジェンダー平等を掲げるようなスポーツリーグってそんなになんていいんですよね。世界的にも、はっきりこういうことを言っていることが魅力的であると言ってくれる選手がいます。世界レベルになるには経費がある程度重要であると思います。今、ヨーロッパに世界の女子選手が集まるのは、ヨーロッパの一流クラブが女子選手に投資をし始めたからと言うことができるでしょう。日本でも1990年代のバブルがはじける少し前ぐらいに、Lリーグのブームがありました。なでしこリーグは、以前、Lリーグという名前でした。日興証券やプリマハムなど、いろんな企業がお金を出して、世界のトップ選手が日本に来ていた時期がありました。本当に各国の代表チームのトップクラスの選手が来ていたのです。その当時、ほかの国にプロリーグがあまりなかったということもあるのですが、やはりペイが良かった、条件が良かったということです。こういった形で、世界中からトップの選手が来られるようにするには、リーグとして、各クラブがそれだけの財政的な余裕を持たなきゃいけません。そのためには興業として成功させなくてはいけない、入場者数を増やさなければいけない。時間はかかるかと思いますが、各クラブにはもっと外国人選手を取って来てほしいと思います。なでしこジャパンの試合を見ていて思いましたが、特にトップレベルになると日本人の選手ってフェイントの幅が狭いんですよ。足が出てくる。外国人選手といつもやってないというところで、体にしみついたフェイントの幅が、やはり日本人仕様なんですよ。なので、外国人選手、特に足が長かったり背が高かったり、足が早かったりする選手と日常的にやることによって、世界的なレベルに近づいていけるのではないかと思います。

中塚：ありがとうございます。ではこのあたりから次に行きます。

III. WE LEAGUE for サロン 2002
(岡島 喜久子) < 2nd HALF >

1. WE リーグの経営

1) 女子サッカーリーグへの投資

■ 女子サッカーリーグへの投資

- ・ 日本では企業がスポンサー
- ↓ アメリカの女子プロサッカーリーグ(NWSL)では個人
- ↑ 大坂なおみが投資したノースカロライナカレッジ
- ↑ クリントン元大統領の娘とジョージWブッシュ元大統領の娘が投資したワシントンスピリット
- ↓ アメリカでの過去2回のプロリーグ失敗、日本では長期だが限定的

先ほども言いましたけれども、ヨーロッパでは男子のクラブがどんどん女子に投資をするようになりました。日本では企業がスポンサーです。

アメリカの女子プロサッカーリーグは NWSL と言いますが、そちらは個人が投資をしています。実は大坂なおみさんがノースカロライナカレッジのチーム、サッカーに投資をしています。大坂なおみさんは、頑張っている女子スポーツ選手に投資したいということをして、NWSL に言ってきて、リーグ側が何人かのオーナーを紹介し、ノースカロライナのオーナーと一番話が合ったので投資をしたと聞いています。私はノースカロライナカレッジのオーナー、大坂なおみさんではない、はじめのメインのオーナーに会ってきて、そういった事情で大坂なおみさんが投資したことをお聞きしました。加えてクリントン元大統領の娘のチェルシー・クリントン、ジョージ・ブッシュ元大統領の娘のジェナ・ブッシュがワシントン・スピリットに投資しています。大坂なおみさんに比べるとずっと小さな額ですが。

あと NWSL ではロサンゼルスに新しいエンジェルシティというクラブができますが、そのメイン投資者、オーナーは、ハリウッドの女優さんのグループが投資をしています。このようにアメリカは割と女性が女子スポーツに投資をする動きが出ています。

アメリカでは、いまの NWSL は 3 回目です。2 回失敗しています。その失敗は、個人のオーナーがお金を途中で出さなくなってもうやめちゃう。やめてしまった人が数人出てしまったと聞いています。まあ一回目の場合は、40 億円ぐらい集めたんですが選手のペイを高くしすぎて、40 億が 5 年続くはずだったのが一年ちょっとでお金がなくなってしまい、お金の面

で失敗したところがあります。個人のオーナーが個人的な思惑で動いたところがあったかなと思います。日本は企業ですし、長期的なところはあると思います。ただ、もちろん企業によってですが、限定的というか、それほどどんどんお金を使う状況にはないかもしれません。

2) WE リーグのパートナー企業

これが WE LEAGUE のパートナーになってくれた企業です。ヨギボーはビーンのカッションを作っている会社でタイトルスポンサー。今までは女子スポーツに投資をしていませんでした。

The image shows the WE LEAGUE logo and a list of partner companies categorized by tier. The categories and their respective partners are:

- TITLE PARTNER:** yogibo
- OFFICIAL BROADCASTING PARTNER:** DAZN
- GOLD PARTNER / GRASSROOTS PARTNER:** DAIHATSU
- SILVER PARTNERS:** Pilenus, Asahi KASEI, QIO
- SILVER PARTNER / OFFICIAL SUPPLIER:** xesid

この中で女子のスポーツに投資をした、女子サッカーに関わってくださった企業は、一つはダイハツです。長年、高校女子サッカーのパートナーを務めて下さっています。プレナスは、「プレナスなでしこリーグ」のタイトルパートナーであります。ほっともつという外食産業の会社、旭化成ホームプロダクトはメディキュットを作っている会社、X-girl はユニフォームサプライヤーです。これらは今まで女子スポーツには投資をしてこなかったというか、パートナーにはならなかった。なぜかという、やはり女性を応援するということですね。旭化成は女性を応援するんですけども、男性にも家事を手伝ってほしい、家事ができるような男性も育ててほしいという気持ちがあると聞いています。ですから、ちょっと今までは違った形で、WE LEAGUE の理念がスポンサー企業に刺さるような形で出ていったところはあると考えられます。

3) ユニフォーム

X-girlのユニフォームを着た選手です。X-girlはアディダスやプーマといったスポーツメーカーではありません。ストリートファッションというか、まあファッションメーカーです。ここがユニフォームを作ってくれているところがかかなり新しいタイプだと思います。こ

のユニフォームそのものが、各クラブの特徴を出しています。例えば左から2番目、鯨島選手が着ているのは大宮のユニフォームですが、大宮は盆栽が有名だそうです。写真を撮ってるバックグラウンドも盆栽の展示場です。よく見ないと分かりませんが、松の葉っぱが地紋に入っているような形になっています。ヤクルトの、真ん中にあるのが千葉のジェフレディースのユニフォームです。これは千葉の県の形を迷彩柄にしているデザインです。これも地元根拠した、地元企業であるとか、地元の名産に根拠したところという形を取っています。右側はノジマステラです。ノジマということで電流が流れるさまを表しているそうです。

マイナビ仙台は、定禅寺通りという、仙台で有名な通りをバックグラウンドにしています。このユニフォームを撮影する時も、チームスポンサーの名前が出ているパネルの前でなく、その都市、クラブがある地域の有名な場所、その地域の観光に繋がる場所で写真を撮ってくれとお願いし、ユニフォームも、マイナビですと星のマークを使っています。元々ベガルタ仙台が母体のチームです。ベガルタはベガとアルティル、星の名前を使っているの、それを使っているところなんです。

右側にあるのが X-girl の写真です。X-girl はどちらかというストリートファッションで、完全にファッションブランドです。私たちが期待しているのは、X-girl のファンに、ある程度 WE LEAGUE のことを知ってもらおうということです。X-girl は 10 代 20 代でインスタグラムのフォロワーが 35 万人います。その層は、今までサッカーを観ていない層で、WE LEAGUE とか女子サッカーが全然タッチできていない層なんです。今までのなでしこリーグの観客数は、2019 年の平均で 1300 人。主に 30 代から 60 代の男性です。それをだいたい 5,000 人にしていこうとしています。5000 人にするには、今までと同じ層ではなく、全く新しい層のファンを開拓していかないと。一番私たちがターゲットとして来てほしいと思っているのが、子ども連れたファミリーです。サッカーをやっている子どもでもいいし、サッカーをやっていない、これから始める子どもでもいい。でもサッカーファミリー、ファミリーに来てほしい。

もう 1 つターゲットとしたいのが、選手と同じ年代の女性なんです。なかなか女性が女子スポーツを見るというのは、日本ではあまり一般的ではありません。ヨーロッパでは女子スポーツは女性が見るという構図が結構出来ています。だから私はどちらかという

と、日本でも女性が女性を応援する構図を作っていきたいと思います。



2. WE リーグを盛り上げるために

ほかのスポーツとも手を取り合い、またはほかのスポーツに私たちのリソースを提供します。例えばこれからやろうとしているのは、WE LEAGUE でやった WE LEAGUER 研修、女性リーダー研修の画像などを、ほかのスポーツに提供する、女子スポーツに提供することをやっていこうと考えています。

ファミリーを増やして行くには、会場でサッカーだけでなく、子どもが楽しめる場を作っていくことが必要ではないかと思います。サッカーだけの魅力だと 5,000 人はなかなか連れて来れません。お子さんは特に、90 分の試合そのものは飽きてしまいます。ですからたとえばマイナビ仙台は、9 月 11 日の開幕戦に、JAXA と取り組みをしてペットボトルでロケットを作ってみようとか、宇宙の魅力を出すようなパネルを展開してくれたり、というような、JAXA と一緒に取り組みを計画しています。

それから小学生以下のお子さんには、T シャツを無料で配布することを計画しています。そういった形で子どもを連れて来てくれるように、WE LEAGUE で各クラブをお願いしています。

ちふれは熊谷市、飯能市、狭山市、その辺がホーム

タウンですが、ホームタウンの小学一年生に、ちふれの試合スケジュールが入った下敷きを配る。あとは市の教育委員会をお願いして、教育委員会からチラシを配ってもらう。そうすると、当然のように街頭で配ったチラシはすぐ捨てられてしまいますが、教育委員会から小学校を通じて配ったチラシは必ず子どもの手に届きます。ランドセルに入れて帰ってきてくれるから、親の目にも触れます。一緒に日曜日はサッカーを見に行こうと。

いまはコロナの状況で県外に移動ができません。だからむしろ県内で過ごさず。例えば埼玉の子がディズニーランドに行きにくい状況です。ですから県内で、なんかちょっと楽しい、近場で楽しいことができるような取り組みを各クラブにお願いしています。各クラブも、開幕戦、その他のところで、いろんな形の取り組みをしていただくようになっています。

新しいターゲットは女性です。各クラブにお願いしているのは、試合会場で、食べ物で茶色いものだけ出さないように。普通にスタジアムにあるのは、例えば唐揚げだったり焼きそばだったり、アメリカンドックだったりって茶色いものが多いと思いますが、もっとカラフルな、例えばデザート類だったりコーヒーのカートがあったり、フードトラックを出してもらいたいなと思います。あとはタイカレーだとかベトナムの生春巻きだとか、他ではすぐには食べられないもの。東京だったら何でもありますが、長野とか新潟だったらなかなかそういうのはないかもしれない。ということで、そういう取り組みをして新たな層を開拓してほしいと考えています。

最後のスライドです。「こちらから」というところで、WELEAGUE.JP で開幕戦、開幕 3 節のスケジュールなどもありますので、ぜひいらして下さい。

私たちは 1 試合だけを開幕戦とするのではなく、各クラブのホームゲームを全部開幕戦、だから 11 回開幕戦があるとしています。最初が INAC 神戸です。9 月 12 日の 10 時から。

開幕戦は 2 試合テレビ放映があります。あとはダゾーンで無料・有料ハイブリッドで行います。ぜひ皆さんにもご覧頂きたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。以上でございます。

ありがとうございました

情報はこちらから>>

<https://weleague.jp/>

WE

中塚: どうもありがとうございました。特に経営の部分、支える部分を中心に後半戦お話しいただきました。

IV. アディショナルタイム 質疑応答

中塚: 私の方から質問させてください。新しいプロサッカーリーグ立ち上げということで、どうしても J リーグ創設の頃を思い出します。あの頃も J リーグで統一感を持たせようと、ミズノが一括して全クラブのユニフォームをデザインしました。今回は X-girl が全クラブのユニフォームをデザインされたということですか？

岡島: いや、全クラブじゃなく 7 クラブです。

中塚: わかりました。それから、先ほど見せて頂いたパートナーカンパニー。タイトルパートナーはヨギボー、気持ち良さそうなクッションですよね。ダゾーンやダイハツなど、ご紹介いただいた企業は、リーグ全体のスポンサーということですね。

岡島: そうです。

中塚: すると、例えば年間終わったところでリーグから分配金が各クラブに降りていくという作りでよろしいでしょうか。

岡島: そうということです。

中塚: これ以外に各クラブは、自前の経営体として動いていく仕組みを持っていると。

岡島: はい。クラウドファンディングを使ったクラブもあると聞いています。

中塚：なるほど。ありがとうございます。各クラブの経営規模を数字で言っていただくことは可能でしょうか？

岡島：だいたい2～3億から4～5億ぐらいじゃないかと思います。もちろんクラブによって違いがあるでしょうが、だいたいそれぐらいのレベルではないかと思います。

中塚：やはり人件費が大きいわけですね。

岡島：そうですね。全員がプロ選手になりましたから、当然人件費は大きいと思います。

中塚：ありがとうございました。

さて、皆さんからもいろいろご質問やコメントをいただいています。本郷さん、やはりX-girlのところが気になりますよね。

本郷：いまのX-girlとは少しブランドイメージが違うかも知れませんが、もともとはソニックユースというアメリカの有名なバンドのベースやギターを担当していたキム・ゴードンという女性が友人と立ち上げたブランドだったと記憶しています。いわゆる「フェミニスト」と言うとニュアンスが変わってしまっていますが、女性としてロックバンドのフロントマンを担っていたことも特別なことですし、女性は抑圧される存在ではなくもっと自由であるべきという考えのアイコンのような存在でもありました。途中で経営権が変わって、ブランド自体も変わっていった印象もありますが、X-girl立ち上げ時の理念は特に、今日ご説明いただいたWE LEAGUEの理念とすごく近いなと思って興味深くお話を伺っていました。

岡島：そのように聞いています。近いような感じでしたね。

中塚：宇留間さんもその関連でチャットにコメントを書かれています。

宇留間：私が以前、みなとみらいのショッピングセンターで仕事をしていた時に、X-girlさんがテナントで出店されて、今まさに言ってもらったような、自分たちの立ち位置をしっかりと持ちながら、自分

たちの主張を伝えて行くことを、ブランドのアイテムを通じてやっているテナントさんでした。そういう意味では、年代ではあまり区切らないような商品展開でお客様ができるというのは、すごく相性が良いんだろうなと思いました。X-girlができた後に、extra bigという男性ブランドができています。そういう意味では女性の方が主導権をとりながらやっていく、ブランドの成り立ちを考えた時にすごくいいだろうなと思いました。ショッピングセンターにも出店しているので、例えばショッピングセンターを通じていろんなイベントをしていけば、今後WE LEAGUEが浸透していけばいろんな機会も増えていくのでしょうか。すごくいいブランドだなと率直に思ったという感想でした。

岡島：実際ヨギボーさんはX-girlとコラボしたいとおっしゃってます。あとまだ発表してませんが、某スマートウォッチの会社がメディキュット、睡眠にかかわるということで、メディキュットって最近睡眠用のあの圧着ソックスを出してまあヒットしてるんですね。その睡眠にかかわるところでコラボをしたいということも聞いています。ですから、パートナー企業同士の横の繋がりも作る、できる場を私たちが創っていくという試みもしていきます。

中塚：ありがとうございます。他にもいろいろな方からご意見をいただきたいところですが、久しぶりに登場の鈴木崇正さん。シンプルだけど、すごく大事な質問をされています。大住良之さんの本をたくさん手掛けられた編集者で、女子のサッカーにもずいぶん昔からかかわっておられる。そしてWE LEAGUE事務局長で、我々のサロンの仲間でもあります江川純子さんがマネージャーをしていた高校サッカー部のプレーヤーでもあった鈴木さんから…こんな紹介でいいですか…ご質問をお願いします。(チャットを代読)「WE LEAGUEではどんなサッカーを見ることができますか？ プロリーグの商品価値はあくまでサッカーだと思うのでお聞きします」という、本来のサッカーのところにに関する質問です。

岡島：私がJFAの田嶋会長に言われているのは、なでしこリーグとの相違が明確ではないリーグにしないようにということです。ベースはなでしこリーグにいたチームですから、それほど大きくは違わないんだと思いますが、各クラブがシャッフルしました。

選手の移籍があちこちで起こりました。特に全く新しいクラブのサンフレッチェ広島と大宮アルディージャが入ってきたので、かなり入れ替えが激しくなりました。そこに外国人選手が入ってきます。ですからやはり、実行委員とか各クラブの社長と話をしたり、監督さんと話をしたりするところでは、やはり世界を目指すにはもう少し攻撃的に、点を取れる試合になってほしいと皆さん考えていらっしゃる。なでしこジャパンの試合を見てみると、個々の選手の力が強くて、どうしてもやっぱり守備に行ってしまう。変わった動きというか、相手の期待を裏切るような攻撃があまりできていない気がします。攻撃の面で面白い試合ができるようなものを目指してもらっていると聞きしています。ただ、いまは各クラブの準備期間で、9月12日に始まります。やはり見ていただくしかないと思います。

鈴木：すみません、失礼しました。ご回答ありがとうございます。今日とても貴重なお話で。やはりサッカーを見に来る。それに対してお金を払うわけですね。なので商品価値はあくまでサッカーだと思えます。どんなサッカーが見られるのかが、本質的に勝負だと思えます。

岡島：そうですね。やっぱり見ていただくしかないです。ご自身に見ていただく。東京であれば9月12日の13時30分から、ベレーザと浦和レッズの試合は中継されます。

鈴木：有観客ですか？

岡島：有観客です。

鈴木：じゃあスタジアムに行きます。見ます。

岡島：西が丘なので、今の緊急事態宣言下で、マックス2,500というかなり厳しい数字ではあるんですが有観客です。今のところは。

鈴木：理念はすごく大切ですし、みなさんの志には心から賛同しますが、お客さんは理念にはお金払わないですよ。サッカー自体が面白くなければ見にこない、やはりサッカーの本質的な価値が大事なのだと思います。さっき見せていただいたユニフォームなどはマーチャンドライズのマテリアルなのかもしれません

が、美人選手ばかりが起用されているようなことはやめませんか？ そういう男目線から、綺麗で魅力的な女性がサッカーをしているということは、リーグとしてはクローズアップすべきじゃないと思います。各クラブの社長さんをそういうふうには教育しないといけないんじゃないかと思います。

岡島：各クラブにお願いしたのは、子どもからみて憧れられる、カッコいい選手を出してくれということです。実ははじめ、クラブの社長から「どういう選手を出した方がいいですか？ きれいだころですか？」って言われたんです。それは違います。可愛いじゃなくて「かっこいい」という言葉で選んでくださいとお願いしました。あと、理念にお金を払わないのは、個人は払わないかもしれませんがパートナーとなっていただく企業は、理念にお金を払ってくださいました。だから、試合が、リーグが開始するまでは私たちは理念をすごく前に出していきます。一旦サッカーが開始してしまうと、もうほとんどサッカーになってしまうと思いますし、私たちが話をするのもサッカーになると思いますが、今の段階ではどういうサッカーになるか、私たちもちょっとわからないところがあります。プレシーズンマッチがありましたけど、あれは外国人選手が入る前で、これからどうなるかは、私たちも楽しみにしているところではあります。

鈴木：プロリーグのコアバリューについて、僕はちょっと意見が違いますが、そういう戦略というかやり方が、ほんとうに成功なさることをお祈りしてますので、頑張ってください。

岡島：はい、ありがとうございます。

中塚：残り時間が5分余りとなりました。いろんな方からご質問をいただいていますしご紹介したい方もまだまだ大勢いらっしゃいますが、すみません、時間が限られております。最後に私の方から一つ、二つ、思うところと質問も含めてさせていただきます。

先ほども言いましたが、Jリーグ立ち上げの時とどうしてもイメージがかぶります。あの時のびっくりするぐらいの成功、Jリーグバブルという形で立ち上がったのは、一つはプロモーションの成功がすごくあったと思います。ミズノのユニフォームを着て、とんねるず「早く生まれJリーグ」というコマーシャ

ルやっていましたよね。そういうのに比べると、あと1ヶ月を切っているWE LEAGUEの情報が我々が触れることがあまりにも少ない。これは情報発信が不足しているのか、それとも受け手の側が手を抜いているのか。Jが始まった頃からは30年も経っており、テレビから情報を発信しても、情報を届けたいところに届かなくなっているという変化があるかもしれません。そのあたりの盛り上げ戦略、どのようなことをこれから考えておられるのかが一つです。

もう一つは、先ほども少し話がありましたけど、コロナの影響です。開幕の9月12日には何とか落ち着いてくれるのではと期待していましたが、残念ながら9月12日まで緊急事態宣言となりました。私は高校の教員なのですが、今日の職員会議で9月11～12日の文化祭で、保護者も含めた外来者の入場を見合わせるということが決まりました。無観客ですね。無観客とオンラインコンテンツの配信というかたちです。こういった厳しい状況でのWEリーグ開幕にあたり、気にされていること、あるいはこれを逆にバネにしようとしていることなど、もしあればお聞かせください。

岡島：まずはじめの質問、メディアへの露出ですが、いまオリンピック・パラリンピックがあり、スポーツ関係のメディアは全部そちらに行っています。ですからパラリンピックが終わった段階で、集中的に露出するところを計画しています。サッカーのテレビですと、フットブレインは9月4日と11日にWE LEAGUEの特集をしていただきます。雑誌とダゾーンも、パラリンピックが終わる9月上旬から集中的に行きます。あと会場ではエルゴラッソの号外版、特別版を各会場5,000枚、無料で配布し、それに各11クラブのバックグラウンドとか書かれている形です。

コロナに関しては、直接コントロールできるものではありません。ただ、うちのコロナのガイドラインも作ってしまっていて、それに則って対応していきます。準備はもちろんしますが、観客については各自治体に判断は任せるしかないところがあります。このまま5,000人または50%、どちらか少ない方という状況で開催されるという前提で、私たちは準備を進めています。それがそのまま続いていくことを願っているところですね。できることは自分たちがコントロールできるところだけなので、その部分はしっかりやっていくところです。

中塚：ありがとうございます。理念推進ご担当の小林さんはどうですか？ 例えば、いまお聞きして気になったのは、各節一クラブは地域での理念推進活動をされるわけですよね。予定していた活動が、コロナの中でかなり最初は気を使いながらならざるを得ないのかなと思います。

小林：はい、理念推進活動はクラブに任せていて、実は最初の節はジェフなんですけど、ジェフはクラブの30周年もあって、スタジアムで男子のイベントと一緒に華々しくやる予定でした。けどそれができなくなって、オンラインで、いろんな分野で活躍している女性や男性、いろんな地域のリーダーの方と選手が女性活躍と地域のリーダーシップを考えるようなことを考えています。本当はスタジアムで、セミナーっていうか、パネルディスカッションをやるはずでしたが、それができなくなったので、そこはオンラインでやると聞いています。サッカー教室をやったりするところもあるので、そこは本当に考えなければいけないなあと。悩ましいところではあります。

中塚：ありがとうございます。あらゆるところがコロナの一年半、もっと続きますかね、大変な思いをしている中でのWE LEAGUE立ち上げです。しんどい状況ではありますが、コロナもいつかはよくなると思いますので。我々としてもこの非常に、この意欲的なWE LEAGUEを見守りながら、伝えながら、サポートさせていただけたらと思います。

最後に岡島さんから、締めめのコメントをお願いします。

岡島：今日は皆様お忙しい中、WE LEAGUEについて御興味をもっていただきまして、ありがとうございました。色々ご意見をいただいて、私も参考になるところがとてもありました。これからも、私たちの事務局長である江川純子さんが、サロンに関わっていらっしゃるということで、そちらを通じていただいても構いませんので、何かご要望ご質問がありましたらどうぞ、頂けると助かります。ぜひテレビでも、ダゾーンでも、会場に来ていただくのが一番いいんですけども、WE LEAGUEを見ていただくととても嬉しく思います。どうも今日はありがとうございました。

以上（続きはオンライン懇親会）